

【研究論文】

作業療法学生における臨床実習での学びの過程と省察

—テキストマイニングによる分析から—

中島 ともみ, 伊藤 信寿, 藤田 さより, 建木 健, 鈴木 達也

聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部 作業療法学科

**Process of Learning Through Reflections of Student
Occupational Therapists in Clinical Fieldwork**

— From Analysis by the Text Mining —

Tomomi Nakajima, Nobuhisa Ito, Sayori Fujita, Ken Tachiki, Tatsuya Suzuki

Seirei Christopher University School of Rehabilitation Sciences Department of Occupational Therapy

要旨

臨床実習における学びのプロセスを、探索的に明らかにすることを目的に、実習後に行われた振り返りの記述の分析を行った。

その結果、学生は自己内省が行えるようになり、基本的知識の習得だけでなく、エビデンスを求める思考、問題解決のために分析する思考が必要であると考えられるようになっていることが確認できた。この思考は、Dreyfus model では、熟練者レベルの思考である。初心者のレベルである学生が、熟練者レベルの思考に気付くことが出来たことは教員が振り返りシートの作成に関わっていることも要因であると考えられた。

また、コミュニケーションに課題を感じている学生は、物事の優先順位を付けた行動化も同様に課題と考えていることが分かった。優先順位を付けた行動化は、実習中に学ぶことが難しく、臨床実習前からの学内での指導が重要であることも示唆された。

キーワード：臨床実習, 省察, Dreyfus model

Key Words：fieldwork, reflection, Dreyfus model

I. はじめに

Kolb (1984) は、体験的な学習がなされるサービス業種の技術学習や、看護や教師教育などの臨床実習での経験学習の重要性を、学習を結果ではなくプロセスとして捉え、経験学習モデルを提示して述べている。Kolb のモデルでは、具体的な体験を受け、抽象的な概念化、そして能動的な試みへ進むための前段階として、内省的な観察＝振り返りが位置づけられている(和栗, 2012)。振り返り、即ち経験の解釈が重要視されている Kolb のモデルによる技術習得の知見は、広く研究報告がなされており、「体験を通して学びとる」ため振り返りが効果的であることが述べられている。また、ドナルド・ショーンは、実践の中の振り返り (reflection) を、「反省的实践家」の様々な状況での対処の技法の中心をなすものであるとして、行為の中の省察 (Reflection-in-action) と呼んだ (Donald, 2001)。このように実践の学習において、振り返りは非常に重要であるとされ、実践者を育てる教育においても注目されているが、作業療法教育に関する研究は少ない (CiNii 2016 年 3 月検索で論文数 1, キーワード「作業療法, リフレクション, 内省, 学生」)。

作業療法士の養成課程における臨床実習は、観察力及び分析力並びに治療計画の立案能力、及び実践能力を身に付けるために非常に重要な過程である。臨床の現場で作業療法学生(以下、学生)は、「実践における学び」を経験し、学内教育での机上の知識を統合し、臨床家としての実践力につなげていく必要がある。

本学では、卒業までに 3 年次 (8 週間) と 4 年次 (7 週間で 2 回) に行われる長期の臨床実習 (以下、臨床実習) が、実施される。3 年次の実習は、対象者の状態評価と介入計画の立案

(I 期)、4 年次の実習 (II 期・III 期) では、対象者の状態評価と介入計画の立案と、実施までが達成目標となる。その概要と目的には「内省を通して、行動の改善を行うことができる」が明記され、内省からの行動改善が到達目標の一部であり、内省を重視した実習とされている(図 1)。臨床実習での内省は、以下の機会で行われるよう促されている。

評価や実践の学習では、作業療法技術のチェックリスト (図 2) を用い、クリニカルクラクシップにて学習される機会が設けられ、認知的徒弟制における学習段階である見学→模倣→実践→実践の言語化→振り返り→次の課題への探索 (西城, 2012) に続くすべてのサイクルが内包されるように考慮されている。一日毎の振り返りを記載するデイリーノートで課題では、「出来たこと、反省点、今後の目標」を記載し、毎日の内省も促している。中間評価表では、最終評価表の評価項目を用い、評価基準を図 3 のように定め、認知的徒弟制の学習段階を自覚できるよう定めてあり、ここでは自己評価と指導者の客観評価がなされ、自己知覚での評価の妥当性が確保できるよう意図されている。中間評価は、実習の半ばで評価され、後半の行動変容を促すように、今後の行動目標も記述する欄を設けてある。更に実習終了後、学生は、学んだこと・今後の課題・行動目標について内省し、言語化し次期施設での行動目標を立てて、その内容を「振り返りシート」(図 4) に記録している。振り返りシートは、I 期・II 期・III 期の終了後に、実習担当教員と共に実習時の自分自身の学びを振り返り、学生が記入する。教員は、気づきの促しと、今後の行動目標が具体的に明確になるよう助言している。なお、記載された振り返りシートは、次期施設申し送り書として、次期実習施設指導者にて確認され (確

<概要・目的>
 3年次に、学生が作業療法部門において各8週間、実習指導者の指導のもとに作業療法過程を経験し、業務を理解するための実習である。学内で習得した知識および経験を、実習を通して統合し、**将来一人の作業療法士として、自立するための能力を養う**ことを目的とする。
 実習生は実習指導者の指導のもとに、作業療法士としての基本的態度を修得し、職業倫理を学び、作業療法の過程のうち、対象者の評価、治療の計画立案、記録・報告などを体験・習得し、**作業療法の臨床思考過程を理解することを目指す。**

<到達目標>
 到達目標は以下のとおりとします

- ・職業人としての望ましい態度や行動をとることができる
- ・対象者を理解する為の評価を実施できる
- ・対象者の全体像を把握できる
- ・対象者の作業療法計画を立案できる
- ・記録・報告をすることができる
- ・管理・運営について理解することができる
- ・内省を通して、行動の改善を行う事が出来る

図1 臨床実習Iの概要と目的、到達目標

作業療法技術のチェックリスト

項目	見学後の振り返り (作業療法士の行う評価・介入の見学をする)	模倣後の振り返り (作業療法士の行う評価・介入の模倣をする、または一部を体験する)	実施後の振り返り (作業療法士の監督の下、学生が一人で行う評価・介入)
例1) ROMテスト	あらかじめ、検査器具を検査の手順に沿って手元に用意しておく。 (日付:H23, 11, 2)	対象者にわかりやすい説明の練習が必要。専門用語を使わないで指示できるようにする。	基本軸・移動軸を正確に。姿勢を変える回数は少なく。手順はあらかじめ前日にシミュレーションして。さらに手順をメモしておくことで、測り忘れを防ぐ。 (日付:H23, 11, 6)
例2) インテーク面接	対象者の会話を傾聴する。記録は細かく、要点をまとめて。 (日付:H23, 11, 3)	観察点は、表情や声、仕草にも注意する。事実と考察を分けて記録する。 (日付:H23, 11, 4)	聞き出したい事ばかりに気を取られると、尋問口調になってしまう。まずは、話を聞く、共感して接する。後半で直接的(閉鎖的)な質問を重ねて医学的に必要な情報を聞き出す事もある。 (日付:H23, 11, 10)

図2 作業療法技術チェックリストにおける振り返り内容

<評定段階>

- ◎: この調子で努力.
- : 問題点を把握しており, 具体的な行動を実行している.
- △: 問題点を把握しているが, 具体的な目標をたてられない.
- ×: 問題点が把握できず, 具体的な目標もたてられない.

図3 臨床実習中間評価 評定基準

臨床実習 振り返りシート

学籍 _____ 名前 _____

臨床実習Ⅰ 領域 (身障・老年・精神・小児)	
学んだこと: _____	実習Ⅱ指導者 確認印

今後の課題: _____	

行動目標 (具体的に): _____	
臨床実習Ⅱ 領域 (身障・老年・精神・小児)	
学んだこと: _____	

今後の課題: _____	

図 4 臨床実習 振り返りシート

I 期・II 期・III 期の終了後に、実習担当教員と共に実習時の自分自身の様子を振り返り、学生が記入する。振り返った内容は、次期施設申し送り書として、次期実習施設指導者に確認（確認後、捺印）し、指導の継続性を図っている。

認後、捺印)、指導の継続性を図っている。そして、最終実習地でのIII期の振り返りでは、卒業までに学ぶべきことを記載し、実習での学びを学内での学びに反映させるよう促している。

以上のように、本学の臨床実習では、作業療法技術習得の振り返り、1日毎の振り返り、中間評価での振り返り、実習終了後の振り返りがなされ、常に内省を意識する実習内容となっている。学生からは「III期では具体的に目標が立てられるようになった」との言葉を聞くことが出来るが、このカリキュラム構成がどのように学生の成長を促しているのかを検証すべきであると考えられた。そこで、3回の臨床実習を通して行った振り返りシートの記載から、臨床実習で何を学んでいるのか、カリキュラムの目的と目標に沿って、内省から行動化がなされているか否かを検討した。

II. 研究の目的

作業療法学生が臨床実習を通して行った省察から、学生の学習のプロセスを明らかにし、今後必要な支援の内容を明らかにすることを目的に、臨床実習を通して行われた振り返りの記述から、実習における学びのプロセスを、探索的に明らかにすることとする。

III. 方法

1) 対象

本学リハビリテーション学部作業療法学科学生の、臨床実習Ⅰ(8週間)・Ⅲ(7週間)にて記載された実習の「振り返りシート」28名分。28名は、I期からIII期までの全ての臨床実習に合格した学生であり、対象学年34名中研究への協力の同意を得られた者とした。なお、本研

究は聖隷クリストファー大学の倫理委員会の承認を受け実施した (承認番号 16040)。

2) 解析方法

臨床実習を通して行った振り返りシートの内, 初回の実習であるⅠ期と最終回であるⅢ期の記載内容をテキストマイニングソフト (IBM SPSS Text Analytics for Surveys16.0.1ver., 以下 TAFS) を用いて, 係り受け解析にてキーワードを抽出, キーワード群を意味のあるまとまりのカテゴリに分類した。その後, 3人以上で共起していたカテゴリの関連性を, TAFSにて描出した。

各カテゴリの記述者数の変化は, 表にして, その変化を経時的に比較した。

注) 係り受け解析

係り受け解析を用いたキーワードの抽出で

は, テキストデータを「人名」「地名」「組織名」「名刺」「形容動詞」「形容詞」「動詞」「その他」以上の8つの品詞に分類し, 同じ1文内に出現しているだけでなく, 「係る語」と「受ける語」の関係が成り立っている時にキーワードとして抽出をする。抽出された係り受け関係のある語句群を, “似たような”意味を持つグループへと分類することをカテゴリ分類という (内田ら, 2012)。

IV. 結果

1) 「学んだこと」の内容の変化

①カテゴリ分類の結果

Ⅰ期では12個の, Ⅲ期では13個のカテゴリを得た (表1)。Ⅰ期では, “対象者”についての記述が最も多かった。次に半数で述べられていたのは, “コミュニケーション”についてで

表1 項目ごとの各カテゴリの記載者数と経時的变化

	学んだこと		今後の課題				行動目標				
	Ⅰ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅲ期			
対象者	20	体験からの学び	22	患者・対象者	12	評価	9	効率の良い行動計画	15	効率の良い行動計画・臨機応変	17
コミュニケーション	15	評価	12	これからのことを考える	11	全体像の把握	8	具体的な行動の記述	11	知識	15
評価	13	対象者	11	自己内省	11	知識全般	8	自己内省	11	実習での学びを今後に生かす	13
体験からの学び	7	コミュニケーション	11	情報の整理と統合	10	自己内省	7	評価	11	エビデンス	10
重要	7	プログラムについて	8	評価	9	コミュニケーション	6	対象者	10	コミュニケーション	9
疾患	7	生活を見る	5	コミュニケーション	8	これからのことを考える	5	コミュニケーション	10	評価	8
作業療法の流れと多様性の理解	6	身障領域	5	疾病	7	効率の良い行動計画	5	疑問・なぜを考える	9	自己分析	7
作業療法士として求められること	5	精神領域	4	効率の良い行動計画	5	対象者	5	疾患	8	分析する力	7
作業の分析	4	作業療法とは	4	知識全般	5	他職種・家族への連携	2	エビデンス	7	対象者	7
観察	4	臨床スキルの向上	4	介入・プログラムの計画	3			知識全般	7	視野・視点の広がり多様性	6
他職種	2	効率の良い行動計画	2	エビデンス	2			実習前, 実習中を意識する	5	国家試験対策	6
情報の統合と分析	2	老年期領域	2	専門用語	2			見学	3	介入の立案	5
		疾患の知識	1	できない事	1			国家試験	2	これからのことを考える	2
				積極性	1			障害をマイナスと捉えない	1		

あった。また、半数近くで“評価”についての記述があった。

Ⅲ期では、3分の2以上の学生で“体験からの学び”が記載されていた。また、“評価”“対象者”“コミュニケーション”についてが、上位に挙がってきていた。

②カテゴリの関連性

3人以上で共起していたカテゴリを描出した結果を図5に示す。I期では、“対象者”が8

カテゴリ中7カテゴリ、“コミュニケーション”が、8カテゴリ中6カテゴリと共起していた。Ⅲ期でも、同様に“コミュニケーション”は他のカテゴリと関連性があったが、“体験からの学び”が、“コミュニケーションより”より多くのカテゴリと共起関係にあった。また、I期では、“体験からの学び”は“対象者”のみと共起していたが、Ⅲ期では9項目中8項目と共起していた。

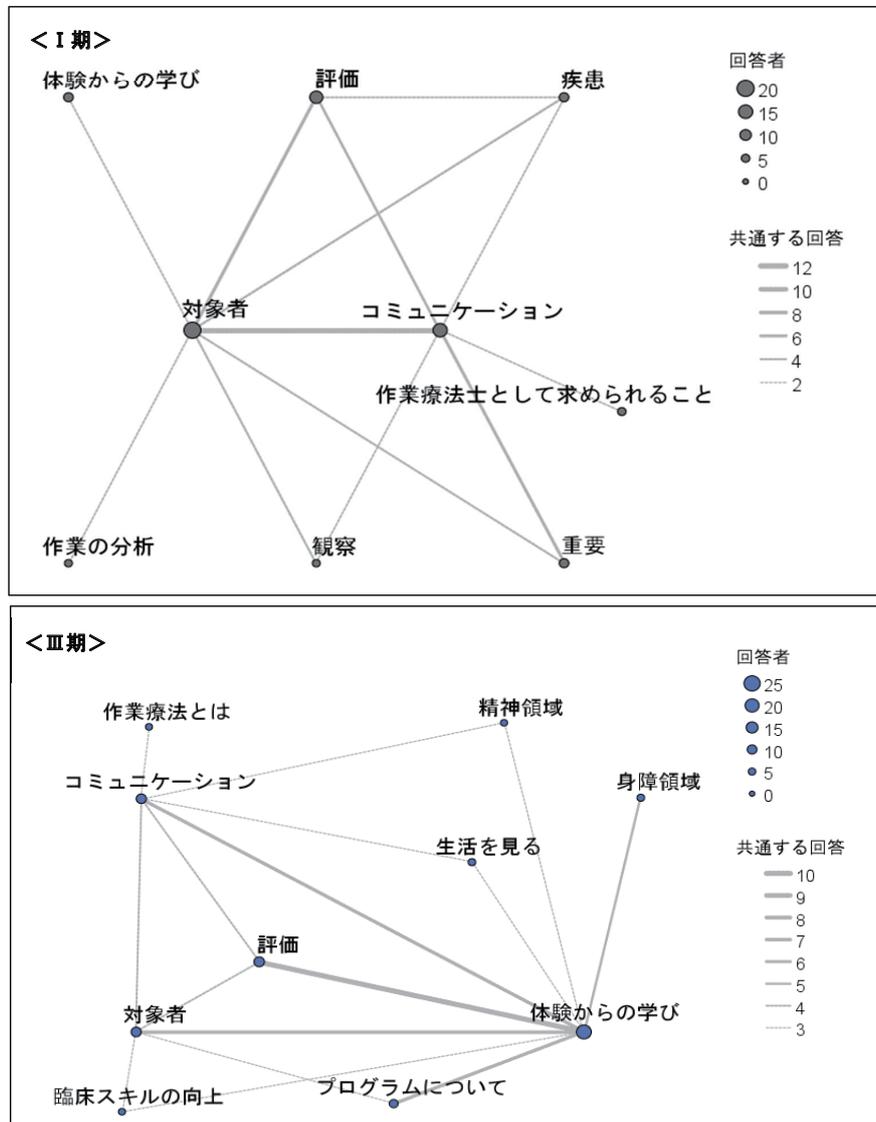


図5 「学んだこと」の記述の変化

2) 「今後の課題」の内容の変化

①カテゴリ分類の結果

I期では, 14個の, Ⅲ期では9個のカテゴリを得た(表1).

I期では, “患者・対象者”が最も多くの学生で述べられていたが, 同程度で“これからのことを考える”“自己内省”が上位に挙がり, 次いで“情報の整理と統合”“評価”のカテゴリが挙げられていた. Ⅲ期では, “評価”“全体像の把握”“知識全般”が上位に挙げられた.

また, “自己内省”や“コミュニケーション”“これからのことを考える”も, 述べる学生が多く, 上位群とは数名の差であった.

②カテゴリの関連性

3人以上の記述で共起していたカテゴリを描出した結果を図6に示す. I期では, “自己内省”と“情報の整理と統合”が最も共起関係が多かった.

Ⅲ期では, “全体像の把握”が最も共起関係が多く, “知識全般”と“評価”“自己内省”と

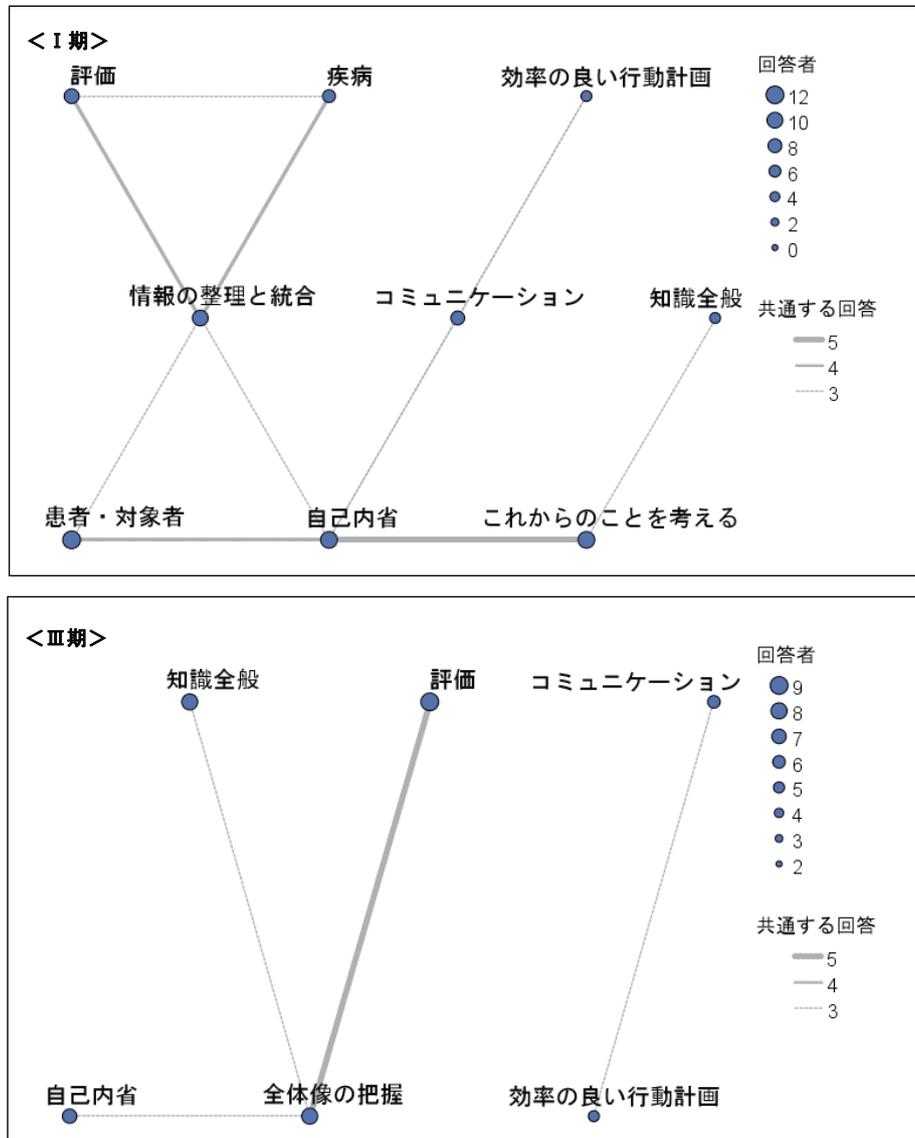


図6 「今後の課題」の記述の変化

共起していた。また、Ⅰ期Ⅲ期ともに“コミュニケーション”と“効率の良い行動計画”が共起していた。

3) 「行動目標」の内容の変化

①カテゴリ分類の結果

行動目標では、Ⅰ期・Ⅲ期ともに“効率の良い行動計画”が、最も多くの学生で述べられており、どちらの期でも半数程度の学生が行うべき行動として述べられていた。

Ⅰ期の他の上位で挙げられたカテゴリは、“具体的な行動の記述”“自己内省”“評価”“対象者”“コミュニケーション”であった。Ⅲ期の上位カテゴリは、“知識”“実習での学びを今後にかす”“エビデンス”が上位に挙がってきていた。

②カテゴリの関連性

Ⅰ期では、“エビデンス”を除くすべてのカテゴリと“効率の良い行動計画”が共起していた。“効率の良い行動計画”は、Ⅲ期において

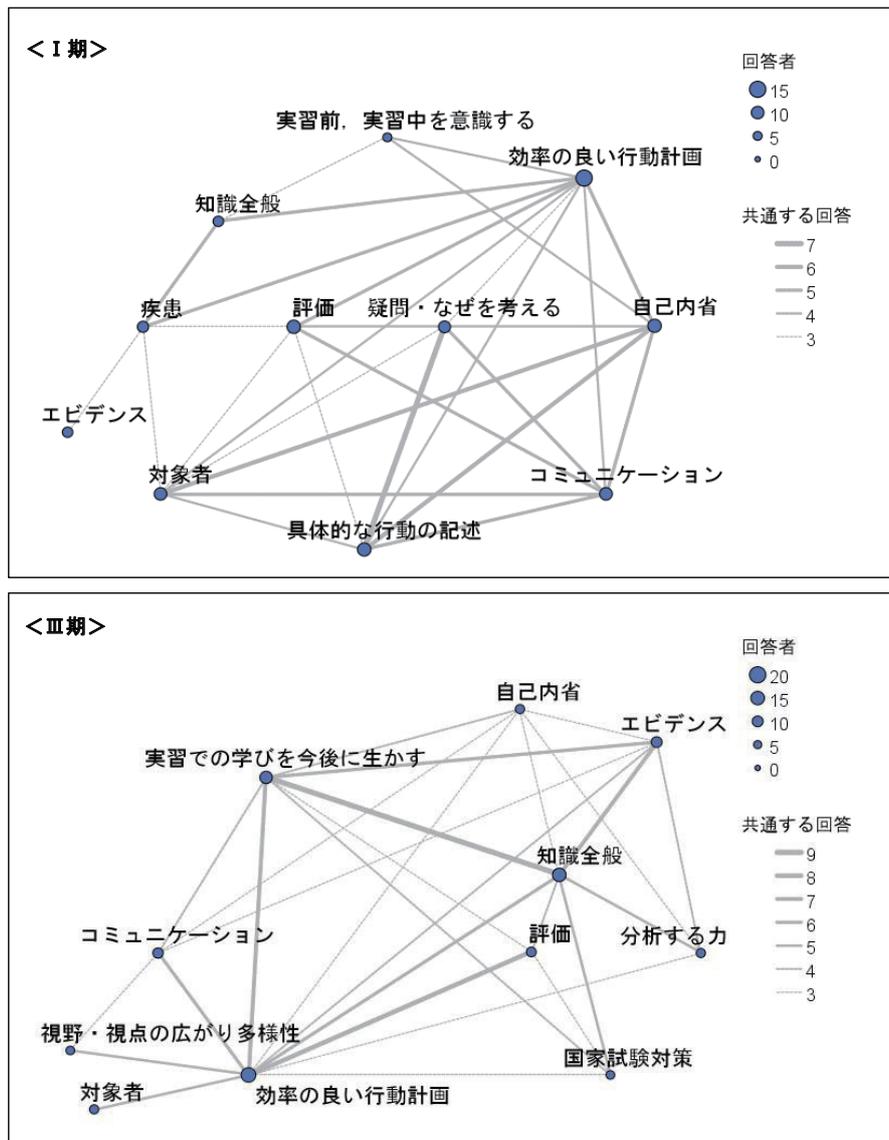


図8 「行動目標」の記述の変化

は全ての項目と共起していた。また、Ⅰ期Ⅲ期ともに、カテゴリ間での共起が複雑に重なっていることが分かった。

V. 考察

1) Ⅰ期Ⅲ期での項目ごとの特徴

①「学んだこと」について

Ⅰ期では、臨床の場で初めて接する“対象者”についての記述が最も多かった。Ⅰ期は初回の長期実習であり、対象者を理解する為に必要とされる事が学びの中心であったことが伺える。次に半数で述べられていたのは、“コミュニケーション”についてであった。およそ同年代だけの生活であった学生が、作業療法士に必要とされるコミュニケーション方法を学んだことが分かった。また、半数近くが挙げていた“評価”については、Ⅰ期の実習は評価実習であり、評価手技について学んだことが記載されていた。

Ⅲ期の「学んだこと」の特徴としては、“体験からの学び”が最も多くの学生で述べられ、また、他のカテゴリとの共起関係も多く、臨床での体験を通して、改めて知識を深めたことが記述されていた。また、“コミュニケーション”については、Ⅰ期と同様に上位に挙がっており、共起関係も多く、作業療法の実践に“コミュニケーション”が重要であることを学んでいることが伺えた。

②「今後の課題」について

Ⅰ期では、情意領域のカテゴリである“患者・対象者”“これからのことを考える”“自己内省”が、認知領域・精神運動領域のカテゴリの“情報の整理と統合”“評価”より上位に挙がっていた。学生が、自身に不足していることは、知識や技術でなく作業療法士としての姿勢であると考えている様子が伺えた。一方、Ⅲ期では、

“評価”“全体像の把握”“知識全般”が上位に挙がり、Ⅰ期と比較して認知領域・精神運動領域のカテゴリが上位を占めた。しかし、“自己内省”や“コミュニケーション”“これからのことを考える”も述べられており、情意領域のカテゴリも変わらず課題として残されていることが分かった。

Ⅰ期・Ⅲ期ともに“自己内省”のカテゴリが、比較的上位に挙がっていることは、自己に向かう意識が表れており、内省を促しているカリキュラムプランニングの目的が十分果たされていると考えられた。また、共起関係からも、Ⅰ期では、“自己内省”を通して、評価実習の目標である“疾病”の知識、“患者・対象者”の“評価”と“情報の整理と統合”がなされ、“これからのことを考える”と“知識全般”の不足を課題として挙げていた様子が分かった。また、自己内省の結果“コミュニケーション”の力不足を感じた様子が伺えた。

Ⅲ期での共起関係では、大きく分けて2グループの共起関係が認められた。認知領域・精神運動領域のカテゴリと言える共起関係では、作業療法の一連の流れに必要な“知識全般”と“評価”だけでなく“全体像の把握”の必要を感じており、多様な視点、俯瞰的な視点で対象者を理解する必要性を感じていたことが分かった。

また、Ⅰ期Ⅲ期ともに情意領域の課題として、“コミュニケーション”と“効率の良い行動計画”が共起していた。コミュニケーションを不得意とする学生の行動特性として、自己のマネジメントが不十分である可能性が示唆された。

③「行動目標」について

“効率の良い行動計画”は、Ⅰ期・Ⅲ期ともに最も多くの学生が行動目標で述べているが、「今後の課題」では下位項目であり、学生の意

識は低い。しかし、共起関係を見ると、I期では、“エビデンス”を除くすべてのカテゴリと“効率の良い行動計画”が共起しており、どの問題にも優先順位を立て、焦点化した行動計画が必要であることがうかがえた。また、他のカテゴリも共起が複雑に重なっており、自分自身の行動改善を図るための具体的な方法が、広い視野で述べられていることが分かった。振り返りシートの記載は、教員との面談を通して記載されることから、このカテゴリは、広い視点で何をどのように解決すべきかを考える思考が、教員のアドバイスにより取り入れられた可能性があると考えられた。

I期で他の上位で挙げられたカテゴリは、“評価”以外は、情意領域と考えられる“具体的な行動の記述”“自己内省”“対象者”“コミュニケーション”であった。一方で、III期の上位カ

テゴリは、“知識”“実習での学びを今後に生かす”“エビデンス”が上位に挙がっており、認知領域・精神運動領域の内容であり、学習を深く学ぶ姿勢が出現していることが伺えた。

2) 振り返りの記述の検討から得られた示唆と今後の課題

実践における学びの段階は、Dreyfus (Dreyfus Dreyfus, 1987) によって技能修得モデルとして Dreyfus model (図9) が示されている。本研究の結果から、「学んだこと」であげられていた認知領域・精神運動領域の内容は、I期・III期、共に基礎的知識や作業療法の基礎的セオリーの内容であった。これは、Dreyfus model の示す、初心者である学生の学びの内容であったと考えられた。「今後の課題」においても、I期では初心者が学ぶべき基礎的知識や

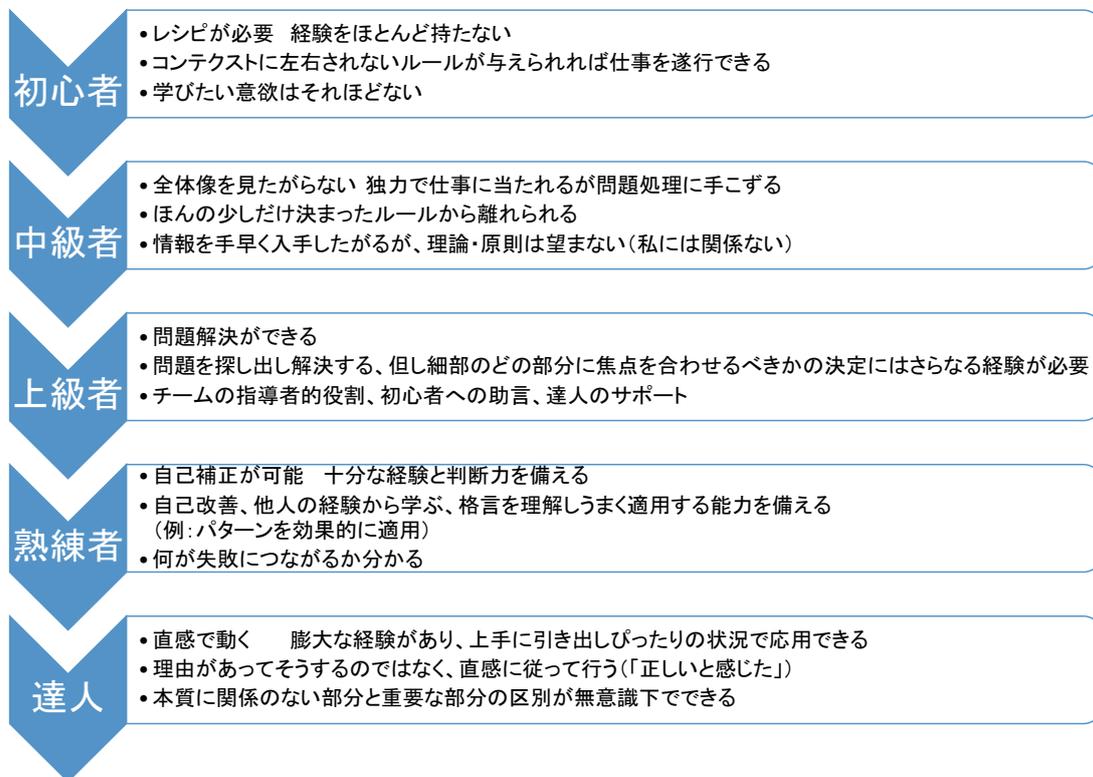


図9 ビギナーからエキスパートまでの5段階
Dreyfus model (1987) を参照に筆者が作成

セオリーが列挙されている。しかし、「行動目標」では、Ⅰ期・Ⅲ期でも“疑問・なぜを考える”“エビデンス”が意識され、Ⅲ期では、“視野・視点の広がり多様性”が挙げられ、物事の全体像を俯瞰する姿勢が表れてきている。これは、Dreyfus model では、上級者以上で現れる思考である。他にも、「今後の課題」でのⅠ期で“自己内省”が表れ、「行動目標」ではⅠ期・Ⅲ期ともに他の多くのカテゴリと共起している。“自己内省”は、何が失敗につながるかを分ることにつながり、自己改善につながる。更に、「行動目標」では、Ⅰ期・Ⅲ期ともに“効率の良い行動計画”が最も多くで挙げられていた。これらの思考では、問題解決の焦点化や問題解決のために優先順位をつける事が意識されている。このような、Dreyfus model の熟練者レベルの思考を、初心者のレベルである学生が思いつくことが出来たことは、「今後の課題」と同様に教員が振り返りシートの作成にメンターとして関わっていることも要因であると考えられた。

また、各期、各項目で共通していたのは、“コミュニケーション”のカテゴリであった。このカテゴリは、「今後の課題」「行動目標」の記述において、“効率の良い行動計画”と共起することが認められる。一方で、“効率の良い行動計画”は、「学んだこと」に挙げられていない。つまり、実習で学ぶことは困難な内容であり、実習においても課題となっていることが分かった。コミュニケーションに苦手感を持つ学生の行動特性として、学内にて早くから取り組むべき問題であると考えられた。

本研究で得られた結果から、本学作業療法学科の実習では、学生は自己内省の姿勢を習得し、エビデンスを求める思考を学んでいることが確認できた。また、効率の良い行動計画の思考である、物事の優先順位を付けた行動化は、臨床

実習前から習得できるよう支援してゆくことが重要であることが分かった。

本研究は、1 学年の傾向を探索的に検討した結果であった。本研究をもとに、複数年にわたって調査し、全体の傾向を調査すべきと考える。

引用文献

- 1) Donald A. Schön (2001). 行為の中の省察 (Reflection-in-Action). 佐藤学 (訳). 専門家像の転換 - 反省的実践家へ. (pp76-128). 東京: ゆみる出版.
- 2) Dreyfus L. Hubert, Dreyfus E. Stuart. (1987). ビギナーからエキスパートまでの5段階. 純粋人工知能批判. 椋田直子 (訳). (pp37-85). 東京都: 株式会社アスキー.
- 3) Kolb D. A. (1984). Experiential learning: experience as the source of learning and development, 検索日 2016年12月1日, URL: <http://www.learningfromexperience.com/images/uploads/process-of-experiential-learning.pdf>
- 4) 内田治, 川嶋敦子, 磯崎幸子. (2012). SPSによるテキストマイニング入門. 東京都: オーム社.
- 5) 西城卓也. (2012). 正統的周辺参加論と認知的徒弟制. 医学教育, 43 (4), 292-293.
- 6) 下村明子, 松村三千子, 杉野文代. (2004). 看護教育におけるロールレタリング- ケアリングに通じるナラティブアプローチと振り返りの分析 -. 日本看護研究学会雑誌, 27 (5), 55-64.
- 7) 和栗百恵. (2012). 「ふりかえり」と学習 - 大学教育のためのふりかえり支援 -. 国立教育政策研究所紀要, 85-100.

Process of Learning Through Reflections of Student Occupational Therapists in Clinical Fieldwork

– From Analysis by the Text Mining –

Tomomi Nakajima, Nobuhisa Ito, Sayori Fujita, Ken Tachiki, Tatsuya Suzuki

Seirei Christopher University School of Rehabilitation Sciences Department of Occupational Therapy

Abstract

For the purpose of exploratively identifying the process of learning in clinical practicum, written reflections from post-fieldwork students were analyzed.

The results confirmed that students became able to self-reflect, and became able to recognize the necessity of not only basic knowledge acquisition but also the type of thinking that seeks evidence as well as analytical thinking for problem solving. These kinds of thinking are considered as expert level in the Dreyfus model. Educators' involvement in development of reflection sheets may have partly contributed to the fact that the students, who were at novice level, became able to recognize thinking at expert level.

Additionally, it was found that those students, who feel communication is a challenging task, considered doing things in order of priority is also challenging. As it is difficult to learn to act in order of priority during clinical practicum, it was also suggested that on-campus instruction prior to commencing the practicum is important.

Key Words : fieldwork, reflection, Dreyfus model